

平成27年度「不登校に関する研修会」講義記録

第3回：平成27年9月25日（金）洲本市文化体育館

テーマ「不登校を出さない学級経営」

講師：長谷川 重和（神戸親和女子大学 准教授）

学級経営は「ルール」と「リレーション」を意識することが大切であるといわれている。その意識化を図る手法のひとつとして教育的グループワークやグループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニングなどのグループアプローチが実施されている。それらは生徒指導提要において「教育相談でも活用できる新たな手法等」として紹介され、それぞれの目的にあったプログラムが提案されている。このような手法は、自己理解や他者理解を促したり児童相互の人間関係を円滑にしたりすることに繋がり、不登校を出さない学級経営を展開するうえで必要なスキルとして認知されている。さらに、学級で起こる様々な問題行動や人間関係のトラブルを未然に防止するという積極的な生徒指導の観点からも注目されている。

県立但馬やまびこの郷では、教育的な環境の中でグループワーク等を計画的に実施しながら、教職員がチームとなって個々の児童生徒にかかわっている。それらのプログラムの目的は、体験的な活動を中核に据え“つながり”を意識させながら“達成感”を感じさせるところにある。教職員は個と集団を意識しながら児童生徒との信頼関係を築いている。不登校で悩んでいる児童生徒へのかかわり方や集団の力を意識したグループアプローチの手法は、不登校を出さない学級経営を考えるうえで大いに参考になるところである。

1 成長し続ける教師

トロント大学（カナダ）のベック教授が、「成長し続ける教師」というテーマで、教職に就いた先生を対象に追跡調査研究をしている。教授は、「教師が子どもの上立って指導する時代は終わった。知識を与える立場ではなく、子どもたちの学びを支えていく立場である。これからの子どもたちには『自分たちで問題を解決する力』を養っていかなくてはならない。」と提言し、グループアプローチの活用や人間関係づくりを推進している。成長し続ける教師は、集団における人間関係を円滑にし、子どもと共によりよいコミュニティを創る力を身につけているのだそうです。

印象に残ったのは、アメリカやカナダの教育においても、集団を意識した学級経営の必要性を次のように訴えていることである。

ア 学校（学級）とは子どもがよりよく生きることを学ぶ場である。

イ 一番大切なのは、クラスコミュニティ（学級）をどう創っていくかである。

ウ 学級経営は、教師と児童、児童相互の人間関係がキーポイントとなる。

- エ 学級づくりは、教科指導の中にも道徳教育にもすべてに統合されている。
- オ 決められたことを教え込むこと（注入主義）は悪くことではないが、大切なことは教師と児童、児童相互の関わりの中でお互いに成長し続けることである。
- カ 成長し続ける教師とは、自分自身の成長を受け止めて、ポジティブに児童との関係を築ける人である。
- キ 成長し続ける教師は、自己認識し自己理解できることからスタートする。
- ク 教師は、「上からの威圧的な関係性」から、「児童に近い尊敬される存在」へと成長することである。

これからの教育は、力を合わせて課題解決していく力を培うことが大切になる。教師は、教科指導においても知識を教え込むのではなく、子どもと共に課題解決しながら成長し続けることが求められている。学級では様々な問題が起こる。子どもと共に試行錯誤を繰り返しながら解決の過程を経ることにより教師も子どもも成長するという。教師は、答えを教えるのではなく児童相互の人間関係を円滑にしながら課題解決の道筋を支援していくことになる。

また、トロント大学附属小学校（ICS）では体験からの学びを大切にされた実践研究がなされている。リチャード校長は、「体験の中から学ばせること」「グループで試行錯誤すること」の大切さを次のように示している。

- ア 主体的な学び「仲間と共に探求する姿勢」を重視する。
- イ 児童相互の学びで問題解決させる。（直ぐに正答を与えない）
- ウ 学び方を身に付ける。

「自分の持っている知識・経験で考える」→「仮説を立て実験」→「ペアで話し合う」→「グループでシェアする」→「試行錯誤し続ける」

このように、集団の中で人間関係を円滑にしながら子どもたちで課題を解決していく児童の姿がICSでは展開している。

この考え方はカナダの教育だけでなく、日本においても次のようなキーワードで示され「チーム」や「集団」、「課題解決」を意識した教育が始まっている。

- ア チーム学校
- イ 小集団による課題解決的な学び
- ウ アクティブラーニング
- エ チームとして取り組む学校教育相談
 - ・ 開発的教育相談：すべての児童生徒に対して
 - ・ 予防的教育相談：欠席が増えた児童生徒に対して
 - ・ 治療的教育相談：不登校状態になった児童生徒に対して

2 人間関係を促進するグループワーク

学級指導などの時間を使って人間関係を促進し、学級の肯定的な雰囲気を醸成する。朝の会や終わりの会、15分間モジュールなどを使って継続的に実施すると効果的である。小学校の低学年でも行うことができる。キーワードは、体験・出会い・気づき・自己理解・他者理解・自己開示・人間関係などである。

エクササイズの例とポイント（抜粋）

ありがとうカード

- ・渡す時に相手の一番欲しいもの（プレゼント）を具体的にイメージする。
- ・「ありがとう」の声の大きさがポイント。学期初めの早い時期に行う。
- ・子どもの「自分が欲しいもの」を知ることによって内面理解の一助となる。
- ・低学年の傾向として、お金で買えないものより買えるものを書くことが多い。
子どもと先生の心の距離を縮める一つの手法

質問じゃんけん 4人組

- ・「アドジャン」と言って、自分の好きな数字を指で出す（1～5）。
- ・全員の数を足した数字の質問項目をテンポよく全員が答える。答えられないときにはパスもあり。他者を理解するひとつになる。
- ・傾聴訓練と併用し、共感的な態度や聴き方を伝えておくことが大事。
- ・質問をクラスで作ると意欲的になる「明日のアドジャンの質問はみんなで決めましょう。」

3 様々な出会いを体験する構成的グループエンカウンター

集団の持つ力を利用して、個人の心を開き、お互いが育つ。構成的とは条件があるということ（時間とメンバー、エクササイズ、プログラムなど）。ファシリテーターがメンバーにエクササイズを体験させる。キーワードは、自己肯定感・自己受容・自尊感情・ふれあいと自他発見・自己理解などである。

(1) ねらい

- ア リレーション（人間関係）の体験を通して、気づきや自己開示を促す。
- イ シェアリングを通して、他者理解や行動の変容、人間的な自己成長を促す。

(2) 流れ

「導入」→「ウォーミングアップ」→「インストラクト」→「エクササイズ」→
「シェアリング」→「自己評価、他者評価」→「まとめ」

(3) 学級経営へ導入する考え方として

- ア 折衷主義（児童の実態とねらい、パーソナリティを生かす）
- イ ルール（学級の規範とモラル）とリレーション（人間関係）

4 課題解決力を高めるロールプレイングの手法

学級では人間関係に起因する様々なトラブルが発生する。ロールプレイングではトラブルを疑似体験し役割を演じることで、これまでに感じなかった気づきが生まれる。トラブルのメカニズムを知り解決の方法を学ぶことは、様々な生徒指導上の問題をそのままにしないという雰囲気を醸成する。また、トラブルのかかわり方にはルールがあることなどを学ぶことで積極的な態度を育むことに繋がる。キーワードは、自己主張・かかわり・折り合い・ふれあいと自他発見・ソーシャルスキル・行動療法的などである。

《流れ》

- ①トラブルをイメージする。
 - ②役割を決め、介入のロールプレイングを行う。
 - ③ピア・メディエーションのルールを知る。
 - ④役割を決め、介入のロールプレイングを行う。
- ・ロールプレイを導入することで、子どもたちに「こんな時どうする」と考えさせる。
 - ・活動を通して「いつも先生が介入して解決できるわけではない」ことを理解させ、問題解決能力を養うことができる。
 - ・カナダの公立小学校では学校をあげてスクールカウンセラーと協力しながらシステム化に取り組んでいる。
 - ・トラブル場面では…「(先生が)一緒に考えてもいい？」とまず同意を得る。
 - お互いの言い分を聞く。
 - 「どんなふうに解決したらいいと思う？」と一緒に考える。
 - ・子どもたちは自分たちの力で問題解決しようとする。

このようにグループアプローチを適切に実践することで、学級集団に肯定的な雰囲気や積極的な人間関係が生まれる。学級雰囲気が肯定的な雰囲気になることで、児童相互に協力関係が生まれる。このことは、学級全体の学力向上にも繋がると考えられている。学級で小さなトラブルが発生しても児童生徒で解決しようとする。教師は、児童の主体的な課題解決の過程を支援する。試行錯誤を繰り返しながら教師も子どもも成長し続け、結果として不登校を出さない学級づくりになることを願っている。